



初等部だより 9月号

鎌倉女子大学初等部
令和7年9月1日
第5号

ふしぎのタネを大切に

部長 大塚 俊明

数年前の夏の読書で「町の音」という言葉に出会いました。試しに我が家の窓を開けて外の音に耳を澄ますと、少し離れた高速道路を走る車のエンジン音が、高くなったり低くなったり繰り返し聞こえてきます。低くなった時には、ここぞとばかりにセミの鳴き声がぐんと大きく響いてきます。ミンミンなのかジージーなのか、とにかくこの暑さの中でよく鳴き続けられるものだと感心してしまいます。

「セミはなぜ鳴くの？」という素朴な疑問。前回の『初等部だより』でも登場したファーブルが、かつてこのことを問題にしたといいます。

ファーブルは、セミがああやって鳴き合うのは、互いに交信しているからだろうと予測しました。しかし、セミには耳らしき器官が見当たりません。そこでファーブルは本当に聞こえているのだろうかと思い、まずセミのとまる木立の下で何人かの男たちに大声を出してもらいます。ところがセミは平気で鳴き続けている。セミには大声でも聞こえていないのかと、彼は次に大砲を借りてきて、木立の傍らでドカンと発射してみました。しかし、セミはそれでも平気で鳴き続けたらしい。

ファーブルは、セミには音は聞こえないと結論づけました。そして、セミは交信のために鳴くのではなく、暑くて気持ちがいいからあのように鳴き続けるのだと推論しました。

結果的には、彼のこの推論は間違っていました。セミは、オスだけが鳴くことは古代から知られていましたが、繁殖のためにあの鳴き声でメスを呼んでいることや、腹部に耳がついていることは、後の研究で明らかになりました。また、人間の大声や大砲の音は、セミの可聴範囲の外にあることからセミには聞こえず、平気で鳴き続けていたことも明らかになってきました。

夏休みが終わりました。長い休みならではの「豊かな体験」を生かした取組もあったのではないかと思います。初等部では、毎年充実した夏の自由研究の成果が見られるということを聞いています。ファーブルが示したような、身近な不思議を大切に研究の成果も楽しみです。

ファーブルの非凡さは、身近な不思議を見逃さない好奇心にあると思います。「ふしぎのタネ」を見つける能力ともいえるでしょう。成長期にある子どもたちの多くが、この非凡さを持ち合わせている存在であると、様々な教育活動を通して感じています。

これからの学校は、子どもたちの好奇心を出発点に「ふしぎのタネ」を大切に育て、教室を「なるほど!」「わかった!」という声が自然にあふれる学びの場にしていくことが求められると考えています。

さて、今年の夏は例年にも増して厳しい暑さが続きました。群馬県伊勢崎市においては、「暑さ日本一」が更新されました。残暑もしばらく続く予想されており、登下校中や学校生活においても、引き続き熱中症への配慮が欠かせません。学校でもこまめな水分補給や休息を心がけていますが、ご家庭でも引き続き健康管理へのご協力をお願いいたします。

2学期は、学習に加えて遠足やみどり祭など、大きな行事も待っています。さまざまな場面で、子どもたちが自ら考え、行動しようとする姿が、たくさん見られることと思います。一人ひとりが自分の成長を感じられる、そんな学期になるよう、教職員一同支援に努めてまいります。

今学期も、どうぞよろしくお願いいたします。